

亀岡市金生寺遺跡出土の瓦器椀にまつわる一考察

山本 梓

1. はじめに

金生寺遺跡は、亀岡市曾我部町の南東部に位置する遺跡であり、これまでの10次に及ぶ調査において、古墳時代の水利に関する遺構から中世の掘立柱建物まで、幅広い時期の遺構および遺物を確認している。その中でも、古代末から中世初頭にかけての集落形成の一端が垣間見られた金生寺遺跡第5次調査では、それ以降の亀岡市内における中世集落の調査を行うにあたり、比較対象として基準となるような良好な出土資料が得られた。一昨年度、調査報告書の一部を執筆したが（荒木・黒坪・引原・山本 2023）、その際に十分な瓦器椀の観察および分析を仕切れなかったため、今回あらためて考察したい。

2. 金生寺遺跡第5次調査の概要

令和元年度に実施した金生寺遺跡第5次調査は、前年度である平成30年度に実施した小規模調査において遺構および遺物が確認できた調査区を拡張したA1・A2地区と、あらたに小規模調査を実施したB～F地区に分かれている。本考察において取り上げるのは、古代末から中世前半期に形成された集落を確認したA1地区であり、掘立柱建物4棟、井戸1基、区画溝1条が主な遺構となっている。このうち、掘立柱建物4棟については、度重なる土石流の流入により削平を受けており、建物を構成する柱穴および柱穴内出土遺物の残存状態があまり良好ではない。そのため、今回の考察対象は、井戸SE210、区画溝SD220の2遺構において出土した瓦器椀に絞り込み、それらの様相や数量分析の結果から、2遺構の存続時期などを再検討する。

3. 丹波型瓦器椀についての整理

（1）研究史

丹波型瓦器椀とは、丹波から但馬の一部を分布範囲とする瓦器椀である。最初に「丹波型」の存在を世に知らしめたのは上牧遺跡報告書（橋本 1980）での橋本久和氏による地域毎の分類研究である。橋本氏は、近畿で出土する瓦器椀を樟葉・和泉・大和・紀伊・丹波の5類型に分類し、それぞれの差異あるいは類似性について言及している。その後、丹波地域の中世集落等の調査で、丹波型瓦器椀の出土例が増えていき、伊野近富氏による丹波地域の編年（伊野 1995）が提示された。なお、伊野氏は近年、新たに出土した資料を加え、丹波地域の分類および編年の再検討を行われている（伊野 2021）。

（２）特徴と年代観

瓦器碗全体の特徴および変化としては、新しくなるにつれて口径が小さくなること、高台の断面形状が台形から三角形に変化・退化すること、体部内外面のミガキが徐々に省略されていくことが挙げられる。具体的な年代観としては、前述の橋本氏や伊野氏の研究によれば、瓦器碗の初現期とされる11世紀半ばから12世紀半ばまでは口径が大きく、体部内外面のミガキも非常に丁寧に施されている。12世紀半ばから13世紀半ばまでは口径が若干小さくなる。13世紀初めには体部外面のミガキは見られなくなり、内面のミガキも省力化してくる。13世紀半ばから14世紀初めには口径がかなり小さくなり、内面のミガキがさらに省力化する。

丹波型瓦器碗の初現は、12世紀半ばと考えている。丹波型瓦器碗のみの特徴としては、他地域の瓦器碗と比較して、口径に対する底径が大きいこと、体部が内湾気味に立ち上がるものが多いこと、口縁端部から1cm程度離れた箇所が肥厚し、体部との境目を強くなでることが挙げられる。なお、丹波型の祖型とされる樟葉型瓦器碗には、口縁端部内面に沈線が施されるが、丹波型瓦器碗には、丹波型初現期に散見される樟葉型の模倣品以外では施されない。

４．SE210 出土の瓦器碗について

（１）整理の方向性

SE210 出土の瓦器碗は、報告書作成の際、それらの出土層位を三段階に分けて整理している（図1・図2）。井戸枳材の検出面から底部にかけての層（井戸枳材内）、井戸枳材検出面の直上層（井戸埋没後の遺物投棄層①）、井戸検出面から遺物投棄層①上面までの層（遺物投棄層②）である。それぞれの出土資料について、口径、底径の数値的な比較分析を以下に行うとともに、口径、底径両方がわかる資料の多い箇所については、底径／口径指数も検討する。比較分析については、0.5cm 刻みで該当する値についてカウントを行った（図3）。

なお、今回の分析については、残存状態が比較的良好であること、数値的な信頼度を保つ必要があることを鑑み、報告書記載分のみを対象とした。

（２）SE210 井戸枳材内出土資料

SE210 井戸枳材内出土資料（図2、1～3）の中には、前述したいわゆる丹波型瓦器碗に該当するものは1点もなく、大半が樟葉型瓦器碗である。内外面に隙間なく、丁寧なミガキが施されており、口縁端部内面には沈線が入る。また、口縁端部内面に段を持つ形で沈線の入る資料（1）や、ミガキの幅がやや太めであり、口縁端部内面に沈線が入らない資料（2・3）があり、それらはそれぞれ大和型、和泉型に分類されるものである。

SE210 井戸枳材内出土の瓦器碗は、全16点であり、口径のわかる資料が11点、底径のわかる資料が5点となっている。口径のわかる資料のうち、過半数の7点が14cmを上回り、中には16cmに迫る個体も見られる。底径のわかる資料は5点のみであり、あまり信頼できるデータとは言えないが、底径5.5cm～6.4cmに概ねおさまる。なお、井戸枳材内出土資料については、底径／口径指数が確認

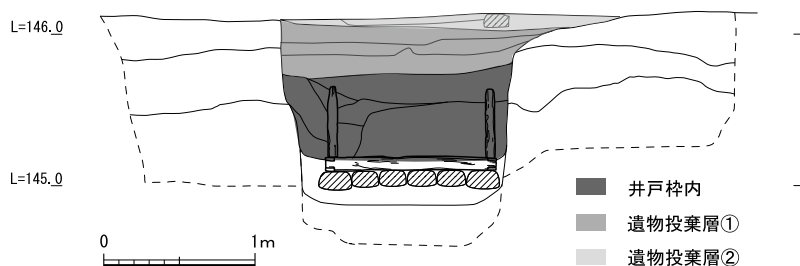


図1 SE210 断面模式図

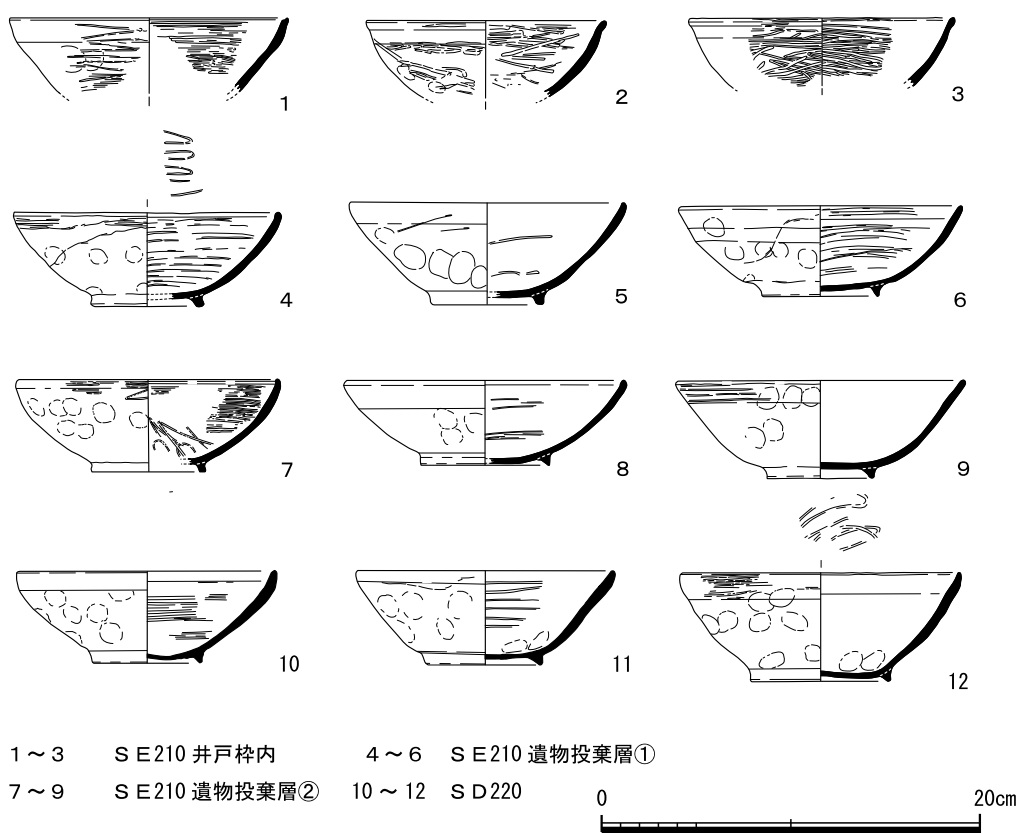


図2 SE210・SD220 出土瓦器碗

できるものがなかった。

以上の様相から、丹波型瓦器碗の初現期にさかのぼる資料と考えると差し支えなく、SE210 井戸枠内出土資料の年代は概ね 12 世紀初頭から半ばに相当すると考えている。

（3）SE210 遺物投棄層①出土資料

SE210 遺物投棄層①出土資料（図2、4～6）は、井戸枠内出土資料とは明らかに様相が異なり、体部外面のミガキがほぼ見られなくなっている。また、若干の個体差は見られるものの、体部内面のミガキも、やや省略傾向にある。そして、口縁端部より下に1～2cmの箇所が肥厚し段を持つ個体、底径が大きい個体が多く、丹波型瓦器碗の特徴がよく表れている。SE210 遺物投棄層①出土の瓦器

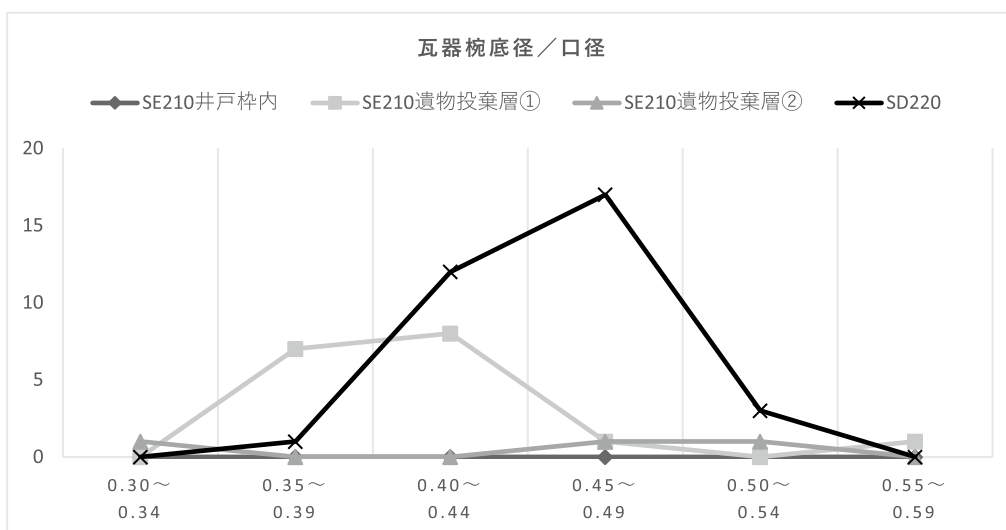
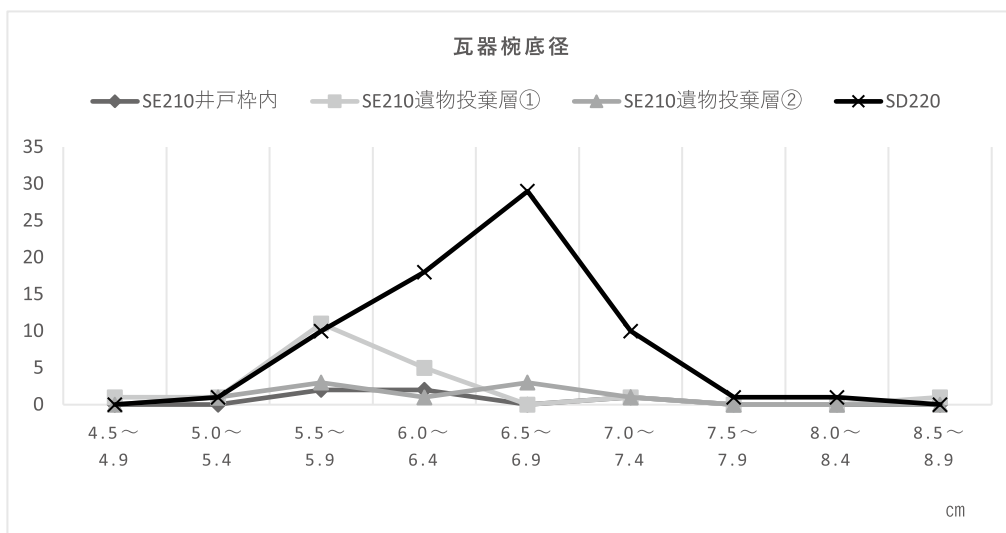
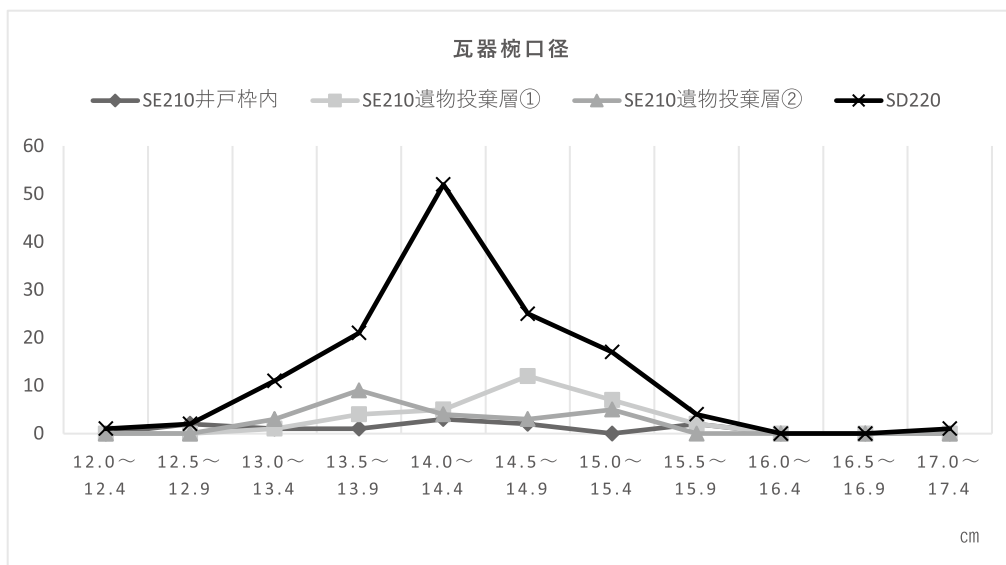


図3 SE210・SD220 出土瓦器碗の法量比較グラフ

碗は、全 34 点であり、口径のわかる資料が 31 点、底径のわかる資料が 20 点、両方がわかる資料が 17 点となっている。井戸杵内出土資料と比べて、比較分析を行える資料数が多いため、数値的な傾向がより顕著に表れた。井戸杵内出土資料では、口径 14cm 以上を測る資料が過半数を占めていたが、遺物投棄層①出土資料では、口径がさらに大きく、14.5 ～ 15.4cm に当てはまる資料が全体の 6 割を占める。底径は井戸杵内出土資料と同様に、5.5 ～ 6.4cm が全体の 8 割を占めている。さらに、底径／口径が算出できる資料が 17 点あり、約 9 割が 0.35 ～ 0.44 内におさまる結果となった。

以上の様相から、SE210 遺物投棄層①出土資料の年代は、丹波型瓦器碗の初現期から最も特徴が顕著に表れる少し前、すなわち 12 世紀半ばから第 4 四半期に入ったあたりまでに相当すると考えている。

（４）SE210 遺物投棄層②出土資料

SE210 遺物投棄層②出土資料（図 2、7 ～ 9）は、残存状態の良好な資料が少ないが、井戸杵内、遺物投棄層①の出土資料と比較すると、明らかに口径の小さな個体が多く、口縁端部少し下に顕著な段が認められる個体が目立つ。

SE210 遺物投棄層②出土の瓦器碗は、全 30 点であり、口径のわかる資料が 24 点、底径のわかる資料が 9 点、両方がわかる資料が 3 点となっている。口径は、遺物投棄層①と比べると、分布にばらつきがあるが、最も割合が大きいのは 13.5 ～ 13.9cm に当てはまる資料であり、全体の約 4 割を占めている。しかしながら、全体の法量が小型化しているのではなく、底径は遺物投棄層①の資料とほぼ変わらない分布を見せている。底径／口径の算出できる資料が 3 点のみであり、明確な傾向を抽出しきれないのが残念ではあるが、丹波型瓦器碗の特徴が最も顕著に表れている様子が見て取れる。以上の様相と、同一層から出土した土師器皿の様相等も踏まえて、12 世紀末から 13 世紀初頭に位置づけることが可能である。

5. SD220 出土の瓦器碗について

SD220 出土資料（図 2、10 ～ 12）は、体部外面のミガキはごく一部の個体の口縁端部付近に施されている程度であり、成形時の粘土紐痕および指頭圧痕が明確に見て取れる個体が散見される。SE210 遺物投棄層①②資料では、口縁端部より 1 ～ 2 cm 下に段を持つ個体が多く見られたが、SD220 では口縁端部～底部の外形が直線的で、碗でありながら杯のような形状となる個体が一定数あった。外形が直線的になるところは丹波型瓦器碗の特徴のひとつであり、12 世紀第 4 四半期以降の資料で顕著になる傾向があると考えている。

SD220 出土の瓦器碗は、全 171 点であり、口径のわかる資料が 134 点、底径のわかる資料が 70 点、両方がわかる資料が 33 点となっている。口径は、最も割合が多いのは 14.0 ～ 14.4cm に当てはまる資料であり、全体の約 4 割を占めている。また、底径については、これまで挙げてきた資料の中で一番大きい。6.5cm ～ 6.9cm を測る資料の割合が最も多く、全体の 4 割強がそれに当てはまる。底径／口径についても、やはりこれまで挙げてきた資料よりも大きく、0.45 ～ 0.49 に当てはまる資料

が5割を超えてくる。底径および底径／口径指数の大きさや、外形が直線的に変化していく様相、等を考慮すると、SD220 出土の瓦器碗は 12 世紀末から 13 世紀第 2 四半期に差しかかるあたりに位置づけられる。

6. おわりに

今回、金生寺遺跡第 5 次調査において確認した、SE210、SD220 の両遺構出土の瓦器碗が、良好な一括資料であったことから、これまで行ってきた外形的な特徴や瓦器碗製作時の調整方法の観察に加えて新たに数量的な分析を実施し、それぞれの年代観等についての再検証を試みた。

結論としては、SE210 井戸枠内資料、すなわち SE210 が井戸としての役割を終えた時期が概ね 12 世紀半ばであり、後に埋め立ておよび不要遺物の投棄を行った時点として、① 12 世紀第 4 四半期に差しかかる頃、② 12 世紀末から 13 世紀第 2 四半期にかけて、この 2 つの時期が挙げられるというところで、報告書執筆の際に提示した年代観とそう変わるものではなかったが、数量的な分析を加えたことで、法量的な推移、変化点が明示できたことは、今後亀岡盆地出土の瓦器碗研究を行っていく上で、意義があったと考えている。

参考文献

- 荒木瀬奈・黒坪一樹・引原茂治・山本 梓 2023「金生寺遺跡第 3～5 次」『京都府遺跡調査報告集』第 191 冊（公財）京都府埋蔵文化財調査研究センター
- 石井清司・伊野近富・引原茂治 1985「亀岡盆地出土の瓦器について」『京都考古』第 37 号 京都考古刊行会
- 伊野近富 1995「中世土器の編年(上)」『京都府埋蔵文化財情報』第 57 号（財）京都府埋蔵文化財調査研究センター
- 伊野近富 2021「丹波型瓦器碗の分類と編年」『京都府埋蔵文化財論集』第 8 集（公財）京都府埋蔵文化財調査研究センター
- 橋本久和 1980「第 3 節 瓦器碗の地域色と分布」『上牧遺跡発掘調査報告書』高槻市教育委員会
- 引原茂治・山本 梓 2020「丹波地域における瓦器碗の地域性」『京都府埋蔵文化財情報』第 138 号（公財）京都府埋蔵文化財調査研究センター